

江戸名所圖會

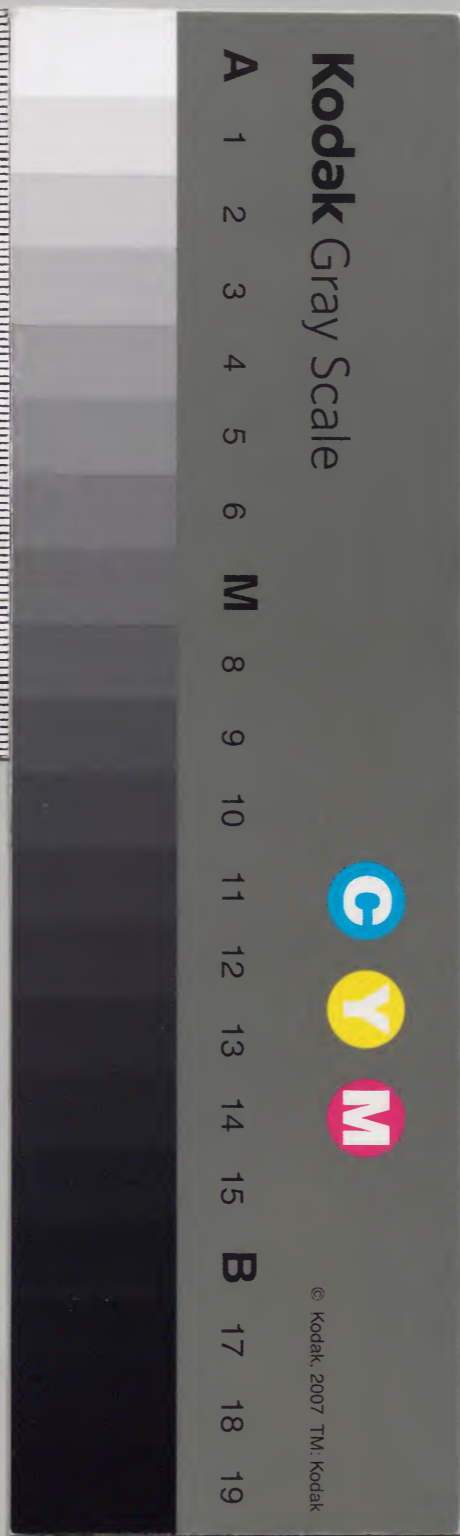
六

			二二七	和
		一四六	三七八	書
二〇四	二〇四	二〇四	二〇四	門
冊	架	函	號	類

庫	文	閣	内	
二二七		二二七		和
函		一八		書
一五	二〇	冊	號	類
架				

内閣文庫	
番號	和 22718
冊數	20 ( 6 )
函號	267 81

共計



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



本牧

十二天宮

本牧の塙

真言宗

多聞院

別當奉祀

祭神ハ十二天神躰ハ海上出現ト云尤佳景の地ナリ神

奈川の基

眺望

絶壁ハ

此社の右

裏手ハ

巖頭

鬱蒼

立

の巨巖

巖頭

教株

の松梅

五十貫文

榮茂

本牧の地

田原北

奈家の

分限

天和

年間

此地の

獵人

吉大夫

とのつる

更

明神社

同所

六町

斗南

の方原

宿

との

あり

相傳

の

綱を

當社の

神躰

を得

小像

の

依

像

浪

漂

此地

止

祭神

垂仁

天皇

の皇子

日本武尊

初の御名

と

武藏

相模

の際

と尊

の東征

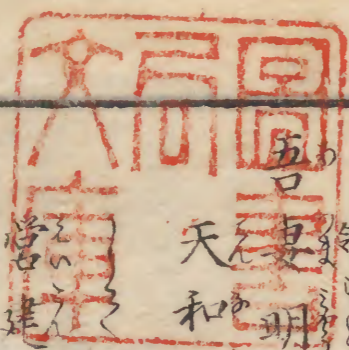
御經過

の地

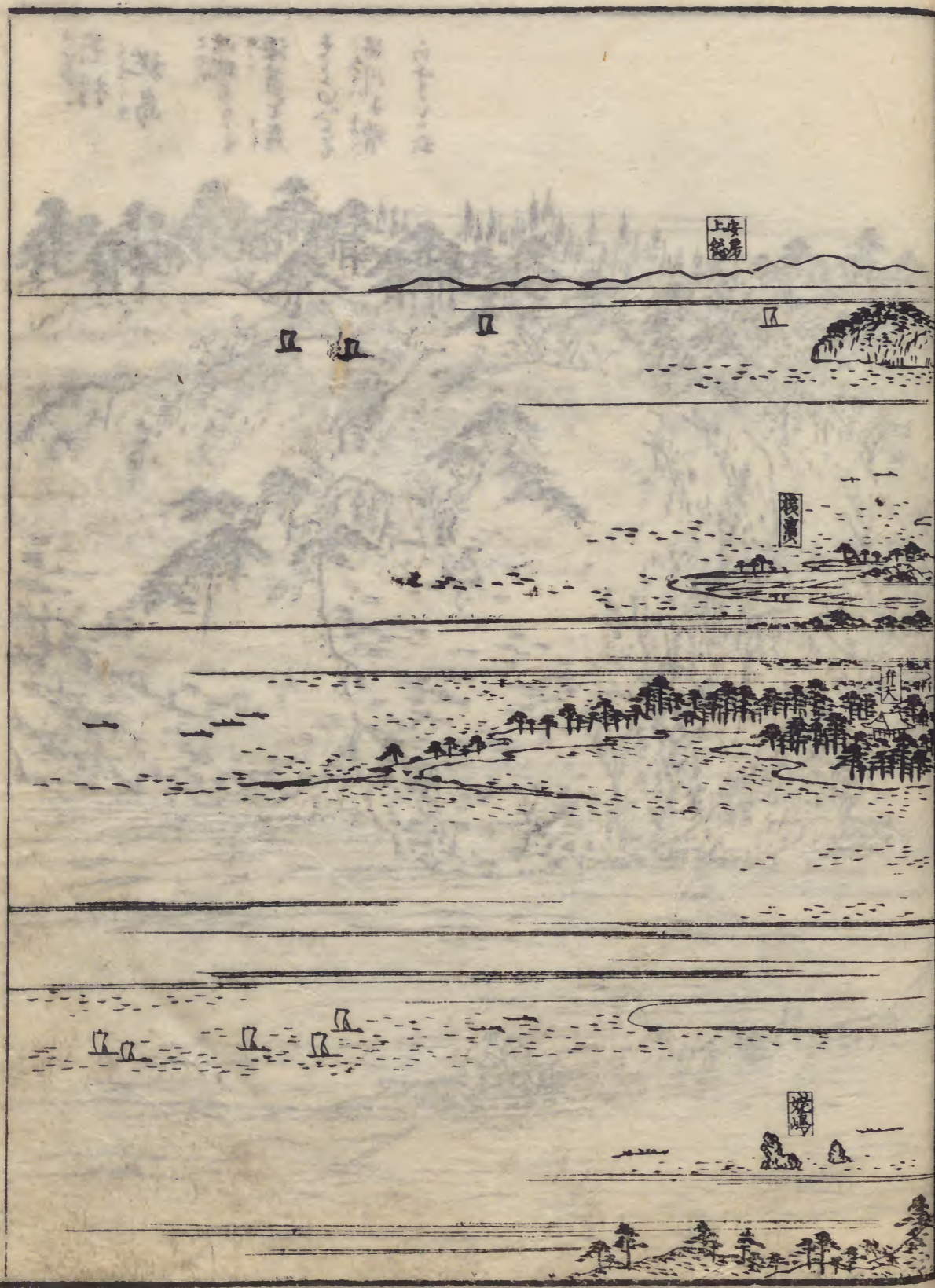
を以

て所

なり



内一〇九〇五號



上野  
寛政  
...

上野

...

...



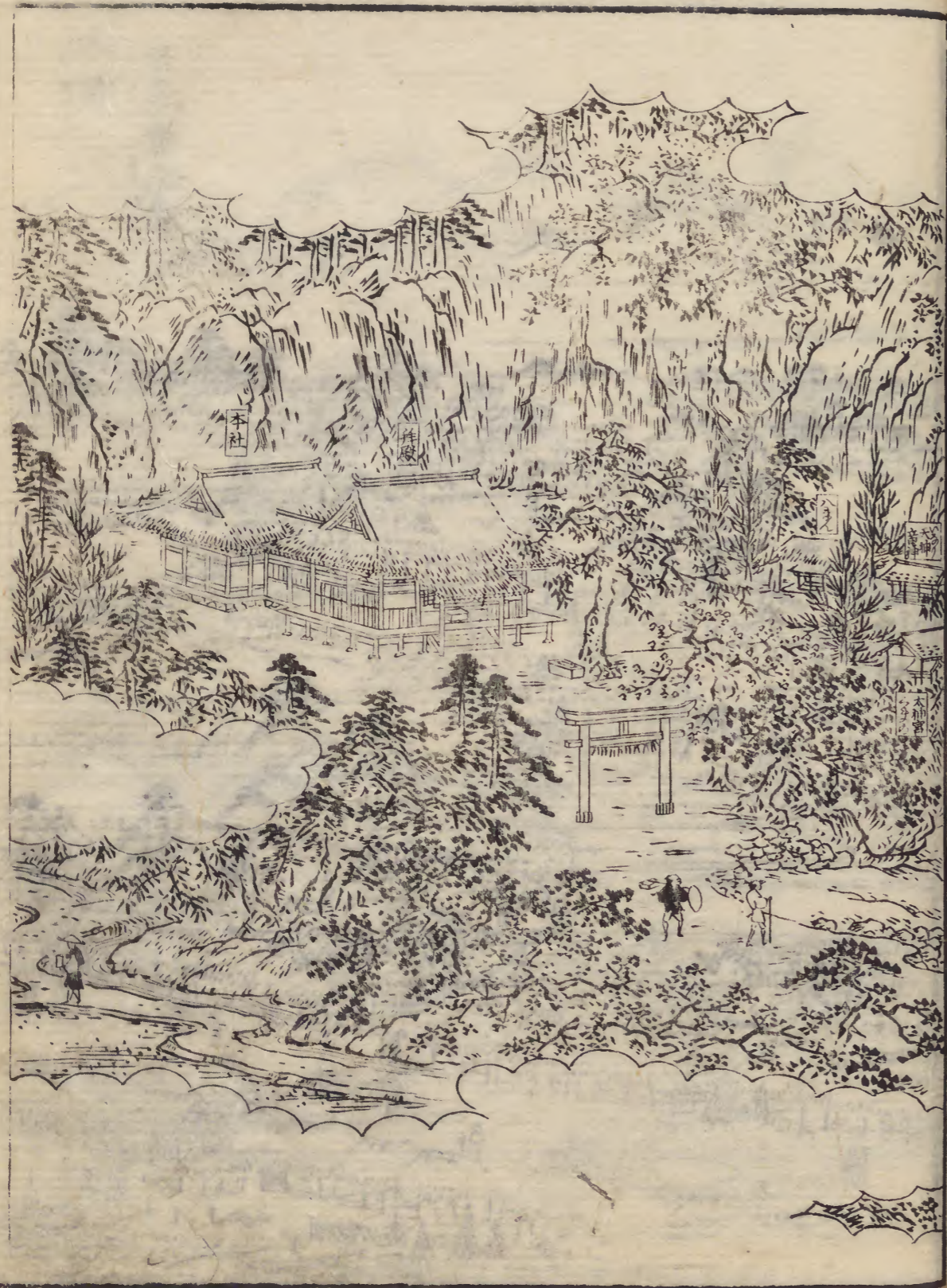
横濱  
辨財天社

...

...



芒村  
死島  
此地ありし  
海苔を産  
もつとも  
呂川増  
らすと云



りんりんのまが  
本牧場  
ちよんてんすう  
十二天社





本牧  
吾妻権現宮





本牧の地は  
 神奈川澤の  
 南に續きそ  
 海上に鋭き  
 一方の地小  
 一々勝區は  
 擧る人あり  
 乃とある取  
 又へり按ぢ  
 本牧の在り  
 昔時牧馬の  
 ころゆふふ  
 海利魚鹽の  
 あり漁人の  
 乃ふ魚とて  
 澤治及び東  
 市少々輸り

新後撰  
 内製  
 登の  
 里乃  
 一々や  
 あれきん  
 ちま  
 新

奉祀一々千歳御神威を仰ぎ奉るも鎮護國家の盛功未  
 代よ及りやの故ある一  
 杉山神社新町より八町あり北の方下星川村あり延喜  
 式内の神社中々靈蹤尤揭然たり今八日蓮宗法性寺と  
 いふあり兼帯奉祀一々釋迦如来を本地佛とせり例祭ハ  
 毎年六月十四日修行也  
 延喜式神名帳曰 都築郡一座小  
 續 杉山神社 第七日  
 美和五年二月庚戌武藏國都築郡扮山神社預之  
 同 官幣以靈驗  
 書曰 十五年五月庚辰奉授武藏國无位杉山名神從  
 五位下  
 按小判本の續日本後紀小扮山は作らざる誤なり

惟子里芝生の南に並み往古ハ宿驛の名なり一々今ハ程ヶ谷  
 驛よ加へり小地名とあるなり  
 此所を下惟子と名け岩間  
 神戶の南にあるを上惟子也



杉山明神社  
延喜式内都築  
郡杉山神社是  
なり



抄入寛永五年齊藤徳元の関東下向記に所の人小此里の若のつれを尋ねし海辺ありあり浦のありありなるを尋ねしかく名解せしと答へしり記せり

平安紀行 かき切ると若つと所あり 持資

日ゆりまをかくてゆきて旅人の汗ふあるかき切りの里 道奥 准后

田國雜記 うづひの宿とつとありて 道奥 准后

鎌倉記行 川幅十五間此流 道奥 准后

地白ある所の記はつとありて 澤庵

惟子川 下惟子の南新町驛舎の入口と流る 澤庵

小架を板橋と惟子橋と号く此川ハ同國都築郡白根の 澤庵

辺よりゆき此地小至り下流ハ久良岐郡戸部村に経る 澤庵

海小會を 澤庵

程ヶ谷新町 東海道官驛の一なり 澤庵

或ハ慶長或ハ慶安或ハ治年間ともその説一なりす 澤庵

三郎と入の所領小机の保土ヶ谷とあり此地を昔ハ小机ハ馬一とありし 澤庵

神奈川より此地迄行程二里九町あり 澤庵

昌の地より 澤庵

神戸川 神戸と上惟子との間の小川あり長二間あり此板 澤庵

橋を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

水を架し 澤庵

惟子川



此是武藏惟子郵  
別家十日經十州  
只思父母不姑舍  
夜々夢魂鄉里遊  
閻齋





平安記行  
 かゝひつと  
 名付る所  
 日盛り  
 かゝる  
 ねさ  
 旅人の  
 汗まふ  
 かつる  
 の里  
 持資  
 惟子里  
 神戸村  
 神明宮



境木  
 とん 土人の称なり  
 武蔵相模の  
 境あり故に  
 傍尔の  
 柁を建  
 らせし  
 らるなり  
 此名あり





あまのさう  
科濃坂  
権太坂  
とも云



此山上より迂り又元和二年三月三日今のゆく平地へ

宮居と造立もと云 見目河神田春日町天神河等の地より

古町街道 芝生の追分より下帷子の右の裏通りを程谷の

元町へ出る通路中より行程十八町あり則古の街道

なり万治二年 慶長或ハハ今のゆく通路を改られより裏

通より古町街道と稱し今の驛舎を新町と名しなり

帷子橋造替の路ハ此古町 御道と往還の通路と也

界木 立場より道より右ハ武蔵相模の國界の傍尔城

建より此稱あり此地牡丹餅を名産とを是を製する店

品野坂 或ハ信濃又 俗ハ権太坂と号す此地ハ武相の國界より

坂路の両傍中を蒼松の老樹左右ハ森列とを坂上より

右と望めハ芙蓉の白峯玉をけりるより左を顧むる

鎌倉の遠山翠黛濃中より実ハ此地の風光まき一奇觀

と稱す 春日山日記ハ謙信鎌倉鶴岡社恭乃節

江田稻毛小机小杉権現山品野坂杯云海道筋より

この岩を討敗りありハ此地少中世小墨あり

蔭田城跡 新町より金澤通道 蔭田村の内蔭田橋と

のり東南の方五町計と隔て道より左あり土人ハ

城山と号く封域東南ハ一町計南北ハ二町餘あり

小丘なり 郡ハ久良岐 往古吉良左兵衛佐義門此地ハ住す

と云 小田原記ハ永禄十年武田信玄小田原を襲んとす

神大寺 左兵衛佐居住なり 左兵衛佐其項大橋守康忠北見附

人教も多し 多目周防守より其項青木とす 蔭田あり

此妻女の宅と焼せり 生より 輕部豊前守泰則より 蔭田

振云同心とを連れて蔭田と守護し 輕部豊前守泰則より 蔭田



東蓮寺  
二位禪尼影堂  
住吉明神社

青水明神社



二位 禪尼 影堂

井戸ヶ谷村 乘蓮寺

西光山と号し古義真言宗石川室生寺に属す

ありてハ各吉良のやまきの前ある山ふのりて鑿池とありけりハ此  
 来りてありて  
 二位 禪尼 影堂 井戸ヶ谷村 乘蓮寺と云ふ  
 秘傳不動尊あり慶安二年知草とありと云  
 地ハ禪尼分領の地なりニ公の生前自影堂  
 等身あり四十計の繪中と建く乘蓮寺と号せり其後度々  
 右の念珠と持しと秀善法印勸進の功を慕り寛永  
 兵乱の為ニ破壊せしと再興とのありハ梁牌  
 十年癸酉影堂と再興とのありハ梁牌  
 書ける牌あり二位尼の銘ニ詳なり其文左  
 平政子の牌ありと云

梁牌銘曰

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 將 家 北 方  
 頼 家 實 朝 而 公 為 慈 女 頼 朝 公 逝 去 後 經 二 十 六 年  
 嘉 祿 元 乙 酉 年 七 月 十 三 日 卒 法 名 如 實 世 人 号 尼  
 將 軍 是 也 井 土 谷 卿 依 為 尼 公 分 領 有 日 立 影 堂 号  
 乘 蓮 寺 雖 建 立 者 也 兵 乱 破 滅 今 秀 善 法 印 廢 堂 号  
 他 力 令 建 立 者 也 御 影 堂 一 宇 國 土 安 全 永 願 成  
 辨 奉 依 立 鎌 倉 二 位 尼 御 影 堂 一 宇 國 土 安 全 永 願 成



寛永十癸酉年三月十一日

大檀那開宮産次郎忠次  
別當 衆蓮寺 秀譽

東鑑脱漏曰嘉祿元年乙酉七月十日庚午丑刻

二位家薨御六十歲是前右大將軍之後室二代

將軍女儀也前漢之呂后而令執行天下給若又

神功皇后令再生令擁護我國皇基給故云云

十二日辛未霽寅刻二位家御事有披露出家男女

併之云云

瑞應山弘明寺金澤通道より十四丁歩右の方へ入る弘明

寺村あり坂東順礼札所の第十四番目なり當寺を

弘法大師開創の佛刹なり中興を光慧阿闍梨と号

古義真言宗石川室生寺に属せり毎年七月十日十二月

十八日市立る大賑あり

東鑑曰治承五年正月廿三日於武藏國長尾寺

源家累代祈願所也云云

本堂本尊十一面觀世音菩薩基大士一三禮なり彫造なりと云

佛龕背面銘曰中興光慧阿闍梨注荒木横削長六尺の立像

荒木作表本有横削横度十方立像堅救三世長六

尺約六丈十一面頭果地各行基示深旨也

天満宮本堂の内右の股壇あり昔浪華の依家某菅神の像一軀と

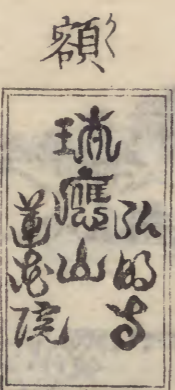
携へ來りて懸と舊むと欲せしむる買人と云寺主喜躍

しと讚と稱旅客笑く云く我有縁の價と求むらんを世宝と云

神と稱と中階前内大臣通茂公の御業指若氏斯か此地ありと崇め

神と稱と和歌の入り大は感應をゆくと因る神恩を謝し

神殿造營せしむ



本堂の向拜と掲る

大角信勝筆

熊野推現祠本堂の左の方此山ありて往古行基大士此地に至る時

鳥小乘推現の神靈と祀り其白狐は踏るものと指荷と

麻耳山熊野阿部井あり按よか縁起よ弘法大師獲摩壇の跡と稱し是ありん



神明宮



鯨鐘 堂前右の坊の上より鐘の私安九年九月廿五日鐘浴ののちて願主

七ツ石 法印長慶といふ名と注せり今の鐘は寛政十年に改鑄せり

然 若堂舎破壊及び修理の力をとむる時八回らうらうら此石現見せり

同郷檀家の庭中より知りしとあり寺僧喜切當年印堂の再堂を企つて

後 具は靈驗集に云く此石今二王門の傍にニツあり又最戸村に云く此石を

二王門 石階の下にあり陰剛密迹の両像ハ運慶の作り各九尺餘其の

小田原北条家制札 永保十年丁卯十月二日 石巻彦六郎とあり

同寺領寄附證文 天文二年癸巳二月十八日 石巻勘解由左衛門とあり

本尊縁起曰人皇四十五代 聖武天皇の御宇行基大士東國

遊化の頃此地に至りてあまの空中小白蓮乱飛り山上一

散墜を大士怪むく山小登りて果てし神人のませり一を

白狐に乗一ハ靈鳥に乗也 今境内は鎮座の熊野各大士一

告て曰く去る養老年間印度の善無畏三藏遠く我

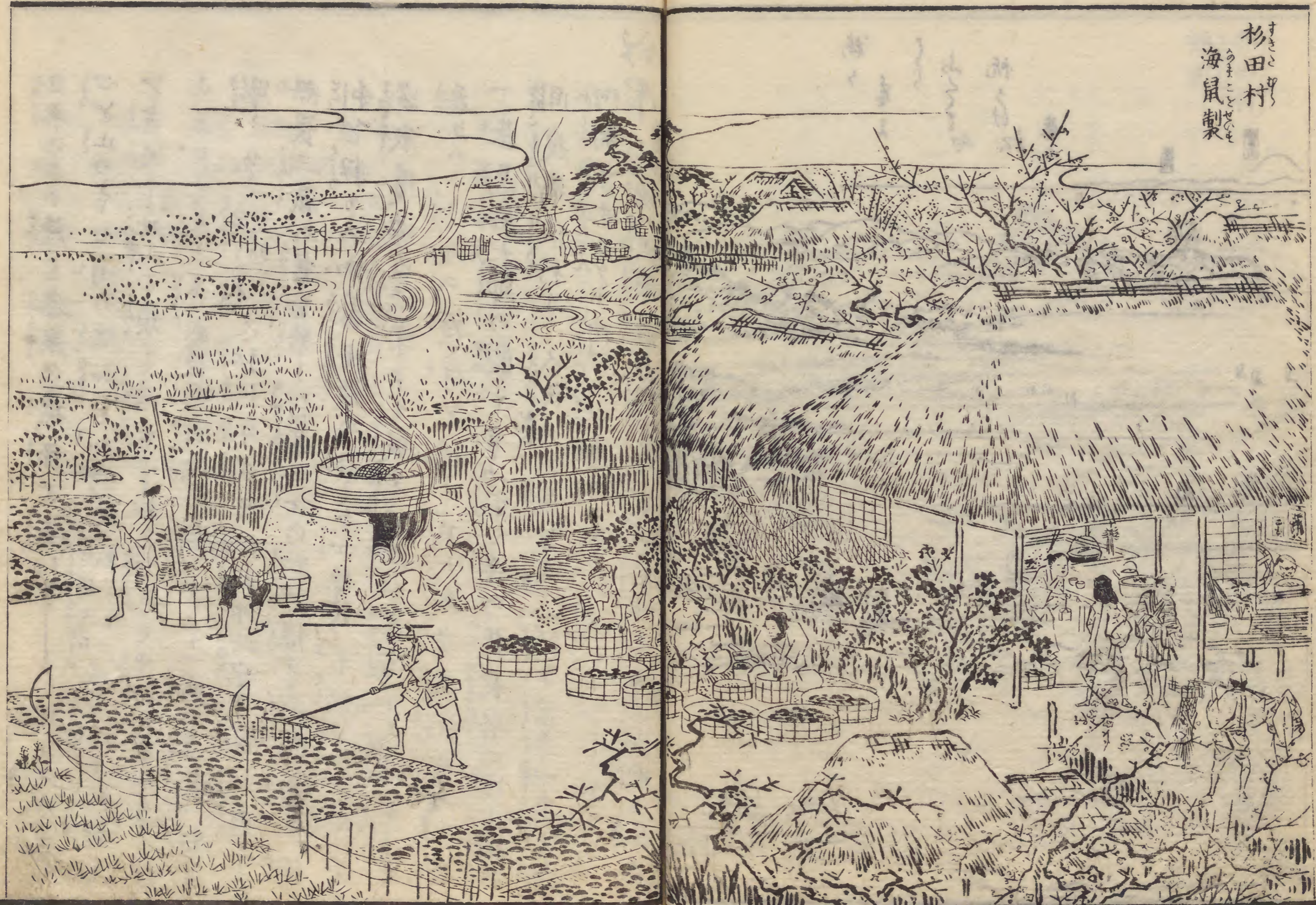


梅ヶ島  
帆ヶ島  
蓼太



杉田村  
梅園

すきと  
杉田村  
あまことせのま  
海鼠製



日本の土小渡と密教の機縁を要むと云々終小此地未だ  
心と止りて七箇の幡石を加持研習七石又其石小陀羅尼  
と書寫此山小鎮と結界と云訖て其方と云々人  
あふ於る大士善無畏の素懐を鑑十一面の尊像一軀を  
彫當寺の本又弘仁年間弘法大師此地錫と飛無  
無畏三蔵の舊興一行基大士の跡を継と大悲者於淨  
刹と靱あふ伽藍安鎮のあゆを四臂の不動と作と  
密教獲神の法樂を般若心徑と書寫一人法繁榮の  
為ハ一千座の護摩と修且大黒愛深武字の宝塔  
一基是皆大師の製多の遥の後長曆の頃武相の  
間疫癘流行人民大是と患時小當寺中與光慧  
阿闍梨本小折此疫災を除滅せと云々  
澤此地ハ六浦莊の内なり吉田兼好法師小此地住れ

絶妙の勝地なりと稱せり往古巨勢金剛此地の勝  
景と摸一畫む及つ筆と投一嘆賞を大明  
心越禪師ハ其佳景西湖似と其八勝准疑一  
八詠の詩賦あり

泊々洲崎晴嵐餘暉滾々狂波遠竹扉市後日斜人  
静消行雲流水自依  
清瀨消秋月不繫舟風傳虚籟心中秋廣寒桂子香  
飄處共看水輪島際浮  
暮雨淒涼夜雨亦驚甘泉洞々聽分明蓬窓掩塞無  
相識腸断君山鐵笛聲  
朝宗萬帆連天無恙輕帆掛日邊教乃高歌落  
雲外依稀數艇到洲前  
風昔稱名藍鐘覺地華鐘晚扣若鯨音幽明聞者咸  
生悟一片迷離祗樹木

涼  
 如  
 折  
 手  
 足  
 八  
 と  
 筆  
 擲  
 松  
 西山  
 宗固



能見堂  
 擲筆松  
 此所より  
 金澤の勝  
 景を平臨  
 する  
 園ハ奈  
 々  
 あり





金澤勝景  
一覽之図

能見堂  
平臨  
所の  
あり

其二

列陣冲冥堪入塞款蘆蕭瑟幾成隊飛鳴宿食恁  
棲進千里傳書誰不愛  
廣内川幕雪沒奇花六出以鋪練渾然王砌山  
河色遍覆危峯露些尖  
獨羨漁翁是作家持竿盪漿日西斜網得魚來沾  
酒飲披蓑高臥任堪誇  
武州金澤擲筆山能見堂有蒲相八景之風味因觀  
鎌倉志甚詳一夕寥寥對青燈漫賦八景之陋句以  
識斯勝境云歲執徐夏日  
東阜越杜多艸

能見堂 金澤稱名寺の良の山上よりく 禪宗の草庵あり

本寺の地藏井ハ惠心僧都の作也一寸八分有りと云  
後世立像二尺五寸計の地藏菩薩を作し 靈像をハ

其胎中より云故に此草庵を地藏院と号く 昔畫工  
近世久世和州侯源廣之建立あり 柳筆山及ひ  
能見堂のニツの額を共小心越禪師の書なり 相傳

巨勢金岡なるもの其真景を写さんと 筆比及ハ





其二





以絶倒ついでたふのつげん堂と云と梅花無蓋うめなしがさ濃見のうみ  
堂どうは作る或人云此地このちより望のぞめハ瀬戸せとの八勝はつしょうまて皆能見みなみ

故ゆゑに能見道のうみちと云とつげん堂つげんどうの松まつと云いふ立たちのりく金澤かねざわと云いふ下くだせと  
澤さわ庵あん和尚おしょうのうらら記きりよ能見堂のうみどうの松まつと云いふ立たちのりく金澤かねざわと云いふ下くだせと  
詞ことば中なかに及およぶと記きされしうらら地蔵ぢざうと云いふ木きと云いふ六む六道むだう能化のうけの意いハ  
擲ちやく筆ひつ松しょう堂どう前まへに存ぞん在ざいす此この大松おほいまつと云いふ巨勢こせ金岡かねおか此地このちの勝景しょうけい筆ひつと  
梅花無蓋うめなしがさ出金澤いでかねざわ七しち八里はちり許攀ゆるか最高頂たかひたか則山々すなはちやまやま  
水々みづづ面々おもも之佳このよ致いた昔むかし畫師えし金岡かねおか絶例たつたがひ擲筆ちやくひつ之の處有あ  
名無基ななし但其名そのな不甚佳よく相傳あひたづ曰濃見堂いひはつみどう也なり中界なか又また  
云畫師えし擲筆ちやくひつ之の萃あは云い萬里居士まんりこし

登々のぼ匍匐ぶふく路攀ろか高たか景集大成けいしゅうたいせい忘却わくご勞らう  
秀水しゅうすい奇山きざん雲不裏うんぷり畫師えし絶倒たつたがひ擲筆ちやくひつ秋毫しゅうご

涼すず松しょう宗因そういん  
此地このち至いたるる金澤かねざわの勝景しょうけいを望のぞめハ畫えハ如ごとく南みなみより西にし

北よめくろくハ皆山中東ハ滄溟ト連テ千里の風光  
窮りなく沖舟の真帆片帆ハ雲小入りとあや一海  
瀬戸の神祠ハ水は臨ミ称名の佛閣ハ山ハ傍リ漁家  
氏屋ハ樹間ハ一瞬ハ遮ミ一日早晩の異なる一年春夏  
又瀬戸の烟湖水の盈虚ハ皆此擲筆松の下ハ平臨  
秋冬の変わり千態万状極りなく南左の一勝地ハ  
ありモ松島象潟の風致ありモ以雅客遊人留連時と  
移モとくとも其十ク一と究り能つモ

金澤山稱名寺 町屋村あり 弥勒院と号ハ真言律に

南都の西大寺ハ属モ當寺ハ龜山帝の勅願所ハ

北条越後守平實時の本願其子顯時の建立ナリ

法名又法名を正慧と此地ハ居住セリ 顯時ハ金澤を家号トシ 顯時

本尊弥勒菩薩ハ唐佛ハ立像五尺五寸あり 傍ハ運慶

の作の地藏菩薩の本像二軀ト安モ 関山ハ審海和尚ト号ス

小田原北条家ハ限帳ハ金澤稱名寺領 金澤ハ伏モあり 又氏綱の三男

菊壽王所領の内ハ金澤稱名寺トあり 地ト注ハ加ハ

愛染堂 本堂の西ハあり 本堂ハ一切經ト收蔵セリ 當寺元亨三年

大結界の圖ハ三重塔ト注シ 道興准后の四國雜記ハ稱名寺ト云

又澤庵和尚の鎌倉記行ハ本堂一宇あり 諸堂皆跡ト云ナリ 五重

鐘樓 本堂の東ハあり 其銘ハ云ク

大日本國武州六浦莊稱名寺鐘銘  
降伏魔力怨除結盡無餘露地擊捷槌菩薩聞當集  
諸欲聞法人度流生九滅聞此妙響音盡當雲集此  
諸行無常是生滅法生滅已寂滅鐘聲當願衆生  
悉有佛性如來常住無有衰易一聽鐘聲當願衆生  
斷三界苦煩證菩提  
文永己巳仲冬七日奉爲先考先妣結縁人等同成  
正覺鑄之



寺  
名  
稱  
五  
尊  
觀  
音  
堂  
五  
尊  
觀  
音  
堂  
五  
尊  
觀  
音  
堂





金澤頭時墓



金澤貞顯墓

大檀那越後守平朝臣實時龜ヶ谷禪尼

宋入宋小比丘 慈洪書 圓種迹

改鑄鐘銘并序 永更永更 赤金重營寺而不可無鐘矣因勸微  
力并募士女更永赤金重營寺而不可無鐘矣因勸微  
伏乞先考超越三有同德於寶應聲道遙十地並位  
狀光世音暨乎四生九類與千周典稱于竺篇  
洪鐘起其始渺焉載觸典稱于竺篇  
實備九乳形象圓定凡厥聽者  
三朝之夕 無愚無賢 醒長夜夢  
之朝之夕 無愚無賢 醒長夜夢  
正安辛丑仲秋九日



大檀那入道正五位下行前越後守平朝臣頭時工  
法名慧日當寺住持沙門審海同行事比丘源阿大工  
和權守物部國光山城推守同依光

金澤頭時墓 當寺大檀那阿彌院後の山の中腹あり  
同貞顯墓 同所小あり頭時の子なり石塔ハ  
五輪あり高きも前不同程あり

美女石焼石 四石と稱するもの其一二あり 金澤  
青葉楓樹 金澤八木と稱するもの一あり 謙曲かと是を作らる

北國記行 金澤より行く 称名とあり 律のあり

つわいば一本は時をむくみあふささるる川をのみり果  
とけりしよきほは本まきあふささるる川をのみり果  
突ゆる楓樹のつらき佛殿の影ふささるる川をのみり果

東國記行

秋のつらきあふささるる川をのみり果  
つわいば一本は時をむくみあふささるる川をのみり果  
とけりしよきほは本まきあふささるる川をのみり果  
突ゆる楓樹のつらき佛殿の影ふささるる川をのみり果

鎌倉記行

西湖梅 鐘樓の影あり 其のあり  
鐘樓の影あり 其のあり  
鐘樓の影あり 其のあり

梅 花無盡蔵 日貼西湖梅詩序 律寺西湖梅以未開  
丙午遺恨 富士則入 邦之山而斯東遊第一之奇觀也  
唯見落蕾 而雖未見其花 豈非東南遊第一之奇觀也  
哉金澤於稱名之庭 以西屬余作詩云 前朝金之  
梅古招提遊十之庭 雖以西屬余作詩云 前朝金之  
遺恨翠禽啼及今年 餘雖以西屬余作詩云 前朝金之  
春摘其花數十片 為一恨未盡 巨福山西有織面丁未之  
之舊廬奉獻 而彼一包於春 見惠焉 己酉借余手 趙昌枝  
條貼其花 近而見之 則於春 見惠焉 己酉借余手 趙昌枝  
所貼其花 近而見之 則於春 見惠焉 己酉借余手 趙昌枝  
觀焉 之次要作 贅語之 則於春 見惠焉 己酉借余手 趙昌枝

六浦秘法日荷上人  
 称名寺の住僧と  
 蔵の基と圍ミ彼  
 寺の二王と  
 贈物と  
 上人勝り  
 うれハ終ふ  
 これを賣て  
 甲州身延  
 山へ至られ  
 うりーと云  
 大力無双の人  
 かな



前朝金澤古招提  
 梅有西湖指枝拜  
 遊十年遲雖啞  
 未開遺恨翠禽帝

一横枝上粘西湖  
 意外春風真假合  
 名字斯花別不呼  
 傍人定道昼成圖

櫻梅 同所あり花ハ重瓣  
 普賢象 本堂の前左の殿あり一品に  
 文珠櫻 同所あり普賢象の對一の  
 室 鐘樓の後あり門に  
 今ハ荒廢せり澤庵和尚の鎌倉記終り人のむとあひもせをかくハ寂莫無人  
 声のつとをとも坐禪觀法の床をちやくとあつとありてみく實莫永乃  
 頃も荒れとさぬ

阿弥陀院 本堂より左山の傍あり  
 二王門 樓門の左右に安置  
 運慶の作あり此二像ハ杉田村東禪寺とのりて不述せり  
 旧の二王多ハ六浦の荒井平次郎光吉公家終小日荷上人と号せり  
 称名寺の住僧と碁と圍ミ二王と賭とを  
 三王の像をぬく身延山へ逃されたりと六浦上行寺に其二王の像の玉眼  
 なりと称する五寸ありの玉と傳へり

熊野新宮 此の西岡の上あり  
 寺寶 佛舍利 祖相兼の舍利と号し  
 龜山帝の秘に  
 國室生山不納置とひと



當寺へ後納すとのり昔ハ  
 彌勒佛泥塑像 張三寸座像  
 愛深明王金銅像 龜山帝の御念持佛  
 請雨經瑜伽論 共ニ管丞相の真跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行ハ二十五字あり此論ハ一部百卷  
 紀州高野の金剛三昧院ハ一巻ハ江州作生島ハ一巻以上合せ

大界外相圖 元亨三年當寺結界の圖  
 元亨三年癸亥二月廿四日

當寺本願越後守實時及ひ顯時貞時貞持等の西像の懸幅あり

揚貴妃玉簾一連 初尾州熱田あり  
 梅花無蓋藏日 金澤稱名律寺開西湖梅以未開為  
 遺恨矣珠簾猫兒支竺群書之目錄無介者而不能

蓋先代財馬  
 又曰寺秘件々之物容易元使人看之也

回國雜記

巻の長さ三尺四寸ひろさ四尺半り水精の  
 此の巻のありふろ花帳ふりやうりやうりやうり  
 中りたれれはあまの感緒今更にたれれはあまの  
 魂を歸すべしとていふ

北條陸奥守制札

全澤阿弥陀堂稱名寺領敷地并垣場等事  
 右於當所軍勢并甲乙人等不の致咎妨狼藉若於  
 令遠亦軍着為被處罪科の被注申交名々状依仰  
 執達如件

康安二年五月廿四日

陸奥守 西

永享十一年稱名寺領結解状

註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛結解状事

合八十貫文内

六十九貫六百文

八貫文

一貫文

八百文

三百文

三百文

己上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日

政所憲意判

當寺北条家繁昌の昔魏巨藍なり物換り

星移り堂宇多く破壊し今ハ山圍と古木聳松杉

梢をありま常小鬱くあり房宇をえるるる寂寞の

扉を閉ち座禪觀法の床をありるに似る

金澤文庫舊址阿弥陀院の後の島と東野文集寺前の

冒と相傳北條越後守平顯時宮建も不ありる内に

和漢の羣書と納め儒書を墨印佛書ハ朱印を用也

印文ハ楷字ゆ々堅ニ金澤文庫の四字と注す印章の

吹よ後上杉安房守憲實執事とり一時再興せると

其後ハ荒廢し書籍散失せりとなりし丙辰紀越後守

清原の教隆ハ群書治要を續せる余々ハ文選清原の師光左傳教隆

其外人家ハ不ありるも一部となりし今ハ東見記云金澤文庫内ハ左傳の卷本三十卷

中原師光ハ跋ありとり鎌倉志一切経の切残りとりの弥勒堂ハありと云

印面大サ  
共如圖

金澤文庫



金澤文庫址  
河所谷

鎌倉大草紙云武州金澤の學校ハ北条九代の繁昌  
昔學問あり旧跡なり是れ今度彼文庫を再建  
種々書籍を入置又上州ハ上杉々分國ありこれハ  
足利ハ京并鎌倉ハ名字の地也他ハ異なりや彼  
足利の學校を建立し種々の文書と異國より求め  
納る此足利の學校ハ上代義和六年ハ小野篁上野  
の國司より一時建立の所同九年篁陸奥守あり  
下向の時此所學校を建る由其旧跡今残り  
るを應仁元年長尾景久ハ沙汰とて改所より  
今の所移る建立し近代の岡山ハ快元とて禪  
僧なり今度安房守公方ハ名字掛の地あれハとて  
學領を寄進し彌書籍を納め學徒を憐愍せられハ  
此頃ハ諸國大に學道絶えりハ此所日本

一所の學校とある是れ猶以て上杉安房守憲実と  
諸國の人を招めりハ西國北國よりも學徒悉く  
集ると云々

觀金澤藏書而作  
遺人來見舊藏書  
玉帳修文講武餘  
縹帙衆晴走蠹魚  
牙籤映日窺蝌蚪  
鄭侯三万欲何如  
圮上一編看不足  
收在胸中壓五車  
照心古教君家有

慕景集  
二月將葉金澤の文庫より終つて三好  
日向勝元の許よりやそれらハ隣家梅花  
表おれや物ともを記すハききも別な梅のり風  
持資

丙辰記行  
懷古淚痕羈旅情  
府儒早晚起蒼生  
人亡書泯幾回歲  
境致空留金澤名  
御所ハ谷阿弥陀院の後の切通と云る畠と云里俗云く  
龜山帝の行宮の跡なりと  
道通ハ則師恭誦の鎌倉志ナリ

此帝勝地佳境へ遊歴のりあり此地も此地へ御幸のりあり  
舊犯に見えずと

魚好法師 閑居跡 其地今あきくらす

魚好家集 武秀園（魚好の遺稿）のりあり

右御の御所跡の露のふたをまきやむる日あり 魚好

藥王寺 三療山と号し称名寺の前道より左側よりあり古義の

真言宗あり龍華寺に属す本尊ハ胎藏界の大日如来

あり座像三尺あり當寺ハ蒲御曹司範頼卿乃

靈牌あり表ハ大寧寺道悟裏ハ天文九年庚子六月

十三日と記し由鎌倉志より物るとりて今その牌

ふるりあり

藥師堂 本堂の前方のあり廊をめぐり本尊藥師佛の像股士十二神あり

本像と共に行基大士の作り深く龕裡ハ秘安あり

天然寺 法爾山と号す同所藥王寺より九丁ありを隔

て瀬戸街道より野島へ杉道の左側よりあり浄土宗あり

鎌倉の光明寺に属せり本尊阿弥陀如来の木佛ハ

座像あり一尺五寸計あり作者あり閑山を然譽

禪方和尚と号す永祿二年二月 寺宝ハ弘法大師及ひ惠心僧都

等の畫りる佛像四五幅あり

龍華寺 知足山弥勒院と号す天然寺より五六町南の方瀬戸

街道洲崎村と町屋村の間道より左側よりあり古義の

真言宗の檀林あり御室仁和寺の末

本尊大日如来ハ座像二尺餘り右ハ弥勒佛の本像を安

す共ハ作者を志し左ハ安置の不動尊あり行基大士の

作りあり立像 太田道灌入道寄附と云閑山を法印



町屋村  
龍華寺

融辨と号  
鐘樓 其堂前左の方にあり

大日本國武州六浦庄金澤郷 知足山龍華寺

唱鐘知識文 夫滄海者鱗甲所潛泰岳者翔蹄所集則知智池者

留塵所浴靈鐘者苦類所息然則洪鐘隆鼓焉非但

善薩勝慧者 乃至盡生死 恆作衆生利

而不趣涅槃 一般善及方便 智度悉加持

諸法及諸有 一頂切皆清淨 愆等調世間

如蓮體本染 不有垢所染 諸伏盡諸有

不染得自生 大欲得清淨 大安樂富饒

卅七尊聰陀羅尼 能作堅固利 光明真言

各梵字略之

天文十年辛丑五月五日

當寺住法印推大僧都善融  
檀那古尾谷中務少輔平重長 道傳

寺寶西界曼荼羅 涅槃像 一幅共唐畫 八祖畫

像 一幅弘法大師或願行 十三佛補像 一幅中將如の不動畫像

五指量愛深明王像 一幅弘法大師の作と云 鈴一箇弘法大師の持物

鳳凰頭 龍頭 十箇共運慶の作の二種の時幡と掛る具あり

當寺ハ治養年間鎌倉右府頼朝公伊豆國三島明神と

金澤瀬戸の地ハ勸請あり 後法味を進まざる為

文覚上人と共に志と合せ文治年間六連の山中に精舎を

創建せし 弥勒菩薩の像と安し 都卒の四十九院に

準擬し 四方に六八の僧坊を建 淨願寺と号 庄園若干

と寄らる 當寺是なり 往古弘法大師獲摩修り 然しあり 殿堂

覺と並へ粉壁八月の光を移せ 伽藍ハ博敞あり 丹柱あり

星の林をなせり 其後正嘉年間南都の恩性律師當山ハ

住し戒律を弘め弘長二年中東寺の能禪法印當寺に  
於く灌頂を修めせしむる印融僧都の附屬に依て光德寺と  
兼帶せしむる此寺も頼朝公の建立なり真言の靈樞なり高野山  
無量光院印融東遊の初此寺に住親筆の書籍文庫あり  
充滿然も教度の兵乱より西院の領地も他も奪はれ大に  
荒廢せしむる明應八年融辨師大永四年甲申八月朔日寂八十二歳深く是を愁へ  
本尊の眞助を頼りし菅原朝臣中務丞資方と合せ  
伽藍再興を企むる時小本爲彌勒大士夢中辨師に告  
めり是より良も當く末世有縁の勝區あり彼所より移  
し三密の法燈を挑へしと夢覺る後其を窺はるる竜  
燈の奇瑞あり洲崎村の境なり此堂舖は教團の竟は辨師  
松あり竜燈の松と号今ハ枯る  
本尊の靈尔に任せ此地に至り二町四方は結界し兼帶  
せしむるの淨願寺光德寺兩院の僧坊を合せ一寺と爲し  
後土御門院の勅を奉りし知足山龍華寺と号師資相

傳の本も聖教を納め善融法印は附屬を此師は相洲小田  
原の城主大森氏の  
末子なり龍王丸と号す辨師の徳を慕ひ淨願寺に入る僧とあり其營  
世は隠れり依り北条左京大夫永樂錢七貫文并柴村權現堂山と寄附  
享祿五年小東寺の寶菩提院亮惠僧正を請りて傳法  
灌頂を受天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越と  
し洪鐘を改鑄せし後太田道灌不動尊の靈像を寄  
附し武運延長を祈り此不動尊の像ハ  
此寺の左に安む靈牌を置來世の  
追福を求るる天正十九年 御開國の後當寺を御修  
營りし御朱印を下ししより四海泰平此祈念  
意りしなり  
當寺ハ真言古義檀林一宗の本寺中々金澤小甲より  
境内中々古木聳え覺樹の粧ひと示し緑竹翠の色を  
なり實相不變の容を頭も海水左右に湛く朝鳥夕兔の  
影を浮へ人家前後に列り山市漁村の觀をなせり二十



浦の郷



鎌倉記行

夕下

鳥帽子

仲より

あき

津

津菴和尚



有餘の末寺ハ林邑ニ散在シテ年々の法會月々の勤修  
恒例ニ任セテ怠る者ナク寶祚の長久武運の萬歳茂  
祈ミテ暮る曉の振鈴の声ハ無明煩惱の眠と覺レ夕比  
梵鐘のひびきヲ三途の迷夢を破る實ニ江南の一精舎也  
善應寺野島山ト号シ同所ヨリ半道シテ盛濱を隔テ南の  
方野島ニ傍テあり真言古義ノ龍華寺ニ属シ本尊  
不動明王の像ヲ作者を考フニ正觀音の本像ハ立像ニ尺斗  
ありテ聖徳太子の作ナリ愛染明王ハ座像一尺五寸斗  
ありテ弘法大師の作ト云此像の胎中ニ愛染子の小像  
千體と作テ籠らるるなり  
野島同所東の出崎中ニ瀨戸橋ハ八町間七八町あり土人  
百軒島ト云此所の出崎ニ紀州亞相頼宣卿の山の出崎ニ稻荷の  
呼々とのみ盛風呂の舊地ありと云餘ニ時ハ必災あり餘ハ百軒島ト  
小祠あり又中腹ヲ菅神の宮あり此地の北ニ北と平方と  
ツハ町屋村の東と金澤原ト云此地の東北海濱と云  
鞆の浦と稱セシ

鎌倉記行

名のありふりしりく自り續を抄  
江と云ふ林の色ハ世ありるなり

乃の秋と云ひあせくありしりり地島の多れ多秋乃之 澤庵

野島渡一野島ヨリ南の方室木村ハ入渡一ヨリ舟路

一町餘とあり江戸ヨリ浦賀ハの近道ナリ

洲崎野島の西瀨戸橋の東北漁村を云鎌倉志ニ云太平

記及び鎌倉年中行事等の書ニ洲崎とあるを鎌倉山

内の西ニある洲崎村のヨリ中ニ此地ありありと見え

瀨戸或ハ迫門洲崎と引越村との間と云

四國雜記 瀨戸を海と云う猶地のまへと云ふなり



瀬戸橋

旅亭  
東屋



其二



瀬戸の沖は海ありてさかすかと

よきかたのたといふ波や瀬戸の汐谷波は人

道真 推后

破山傳ひ語りしものもあはれなりけれ

ききし瀬戸の海は浅山ありて海ありてありてありて

瀬戸橋 同入江は架せ中間の臺を備け橋杭を用ひし

しと長と二間ありて橋二川を渡しと

迫門の明神とて入海よとて山あり古本馬と麓あり橋あり橋の下あり  
瀬戸の明神とて速き山の興まく湖水あり朝引の鳥水鳥も陸より  
まといわす水陸の景氣も朝夕まより金剛も鞍ありとあり云

照天姫松 同所北の方西の出崎あり延寶庚申の大風

吹折の松より連一株の松の根株のを存せり里彦

云く照天姫焼の為小燻られしとて焼く焼くしとての松と

のしと

鎌倉大草紙云 應永三十年癸卯春三月常陸國住人

小栗孫五郎平尚重と云者ありて謀反を起し鎌倉

背こころれハ源持氏結城の城へ勅座ありて同八月

二日より小栗を攻ら終小栗忍ひて三州へ落ゆ

とある条下云今度小栗忍ひて三州へ落ゆ其子

小次郎忍ひて忍ひて關東よありて三州推現堂

と云西へ移るを其邊の強盗を集りて宿城

かりしれハ主の中ハ此浪人を常州有徳仁の福者の由

聞く定て隨身の寶ありて打殺しとて取らる由

終合を乍去健なる家人あり何せん云一人此

盗賊中を酒を毒を入吞せ殺せし先と同一宿の

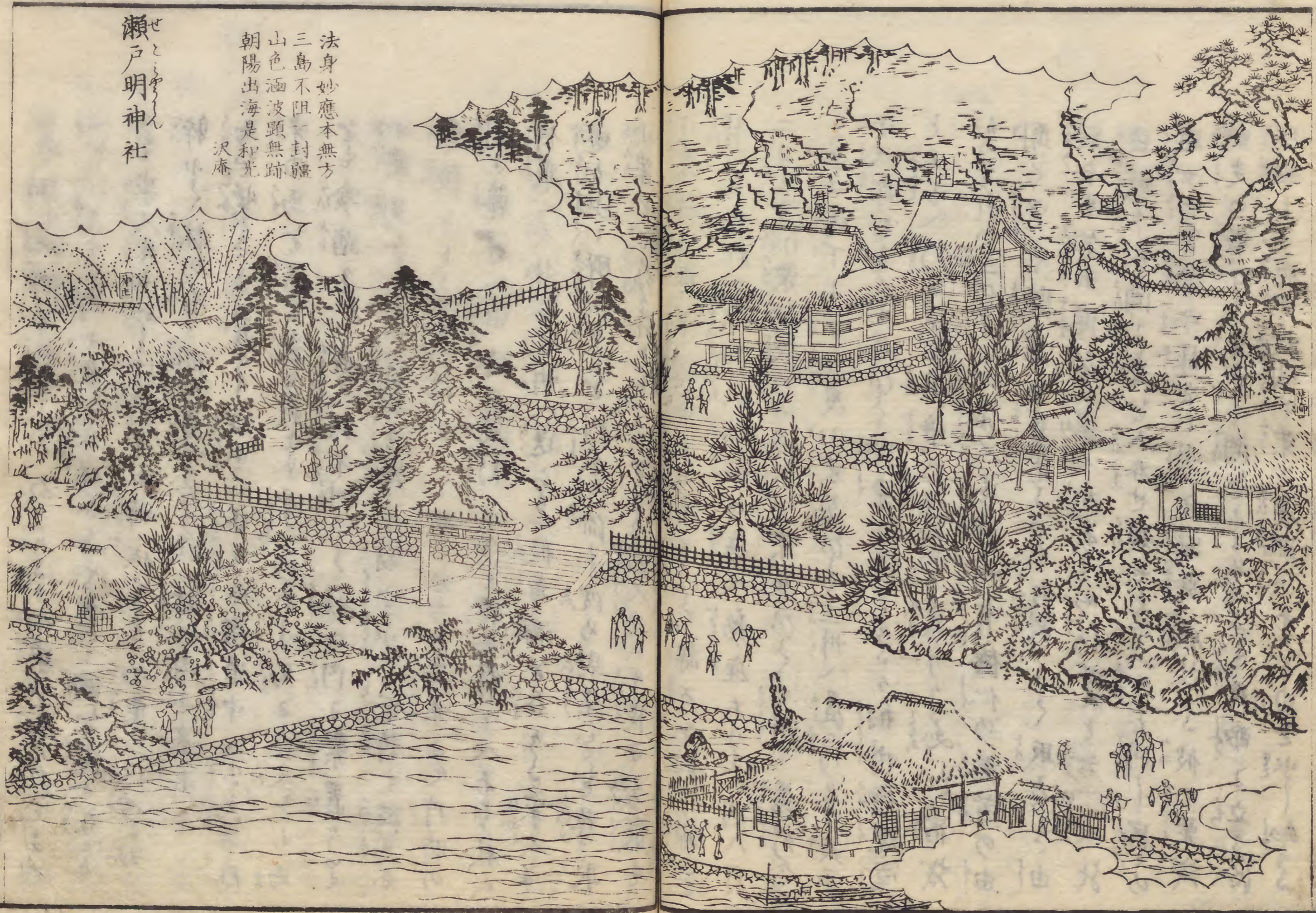
遊女をを集今様を唄ひて踊舞戯れける彼小栗城

馳走の膝小栗を酒を毒を入吞せ殺せし先と同一宿の

照姫と云遊女此間小栗は逢馴此ありとて少し知る

瀬戸明神社

法身妙應本無方  
三島不阻一封疆  
山色涵波頭無跡  
朝陽出海是和光  
沢庵



あや自ら此酒を呑ましありる小栗とありれとあれ  
由と私言る間小栗も呑椀おとてか酒を更は呑り  
る家人たも知れ何をも解伏てり小栗ハ夜初ま出  
斡ゆく林の有る間へ出く足られハ林の内ハ鹿毛なり  
馬を繋ぎ置り此馬ハ盗人共海道中へ出大名往  
来の馬を盗て来られとも才一のあ馬あく人を馬  
とも喰踏られハ盗人共不叶し林の内ハ繋置り  
小栗是をさく密に立帰て財宝少く取持て彼馬ハ  
乗鞭をもち後方ゆる小栗ハ毎双の馬乗せて片時の  
間ハ藤澤の道場へ馳移上人と頼られハ上人あされ  
侍衆二人付り三州へ送らる彼毒酒を呑る家人并  
遊女少く解伏を川水へ流し沈め財宝をも尋取  
小栗をも尋りてもなる盗人共ハ夜半分散る

酔小立る照姫ハ酔々斡ふる酒を呑らりれハ水ハ流れ移川下ありハ上りたをり  
る其後永享の頃小栗三州より来りる彼遊女を尋  
出し種々の宝と与へ盗人共を尋皆誅罰しりその後ハ

### 三州へ代々居住せしり

鎌倉大草紙より考へ照天姫ハ照姫の名と云々小栗の名と世り  
照天と称せれとも同書小次郎とのありて照天と云々とあり  
照天系譜を考へ小栗五郎平満重の子小栗重盛とありて  
照天系譜より大草紙に照天とありて照天とありて照天とありて  
照天とありて照天とありて照天とありて照天とありて照天とありて

瀬戸明神社 瀬戸橋あり一町半西の方道あり右側あり  
祭神 大山祇命一座 神主 千葉氏奉祀 社傳 一云  
當社ハ右大将頼朝公治承四年四月八日豆州三島の淨神と  
勸請なりありとあり鎌倉年中移事あり四月八日瀬戸  
三島大明神臨時の祭礼とあり或云往古此神此地へ飛

来<sup>き</sup> 土人傳へ云今金竜院の庭中飛石と

按<sup>あ</sup> 頼朝卿御倉へ入りて治承四年十月六日ありの東鑑小つ

此<sup>こ</sup> 年四月八豆州の配所北條の館は懐は六浦社領久良岐郡

看<sup>く</sup> 督長像 遊世里人撰師を如へしは依る古色とくしあへ

額 内車小 **世一位大** 世尊寺後二位経尹卿筆

**山精神官**

同額裏書曰 延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之 沙弥寂尹

鳥居額 瀬戸明神 神道長正二位卜部 季兼卿筆

鐘樓 社前右の方あり

瀬戸三島社鐘銘 洪鐘新製寄器海場電村里聽鮮閑静動閑奏敬悲田 鏝化體黃玄緇素益大村覺煩惑夢驚生死眠昏曉清響

劫々永傳 大戒善提薩埵僧普川筆 普川國師益鎌倉室戒寺の筆也

檀那 沙弥釋阿并十方四衆等 勸進 大工 大和權守國盛

藥師堂 本社右あり土人

按<sup>あ</sup> 下僧下野國住人牧野左衛門何某の子ゆくと小次郎とのみ  
父<sup>ちち</sup> 左衛門上州伊香保の湯は谷せ一頭相模國の住人乃稱彈正信俊とのみ  
者<sup>もの</sup> と論一信俊は討れり兄弟の輩親の敵を討むと欲下は身をすの  
此<sup>こ</sup> 瀬戸の三島明神の社前あり信俊はやくり終は親の仇と報ひぬる  
よ<sup>よ</sup> 放<sup>はな</sup>下僧と号する諺曲ありと云と他の書ありと云

三本杉 茶師堂のあり根株相連りて三本あり生せり

蛇混拍 本社右の傍あり題も延宝八年庚申八月六日の暴風吹倒され

梅 花無盡蔵曰文明竜集丙午十有八年小春二十

同 有<sup>あ</sup> 七己亥盤桓瀬戸六浦之濱遺廟之前掛昔時諸

頼書 戸社 自注云六浦廟前有古柏屈蟠



遺廟拍圍六浦橋 朗吟繫馬石支腰  
 歸鴉飛破翠屏面 刺被風聲添晚潮

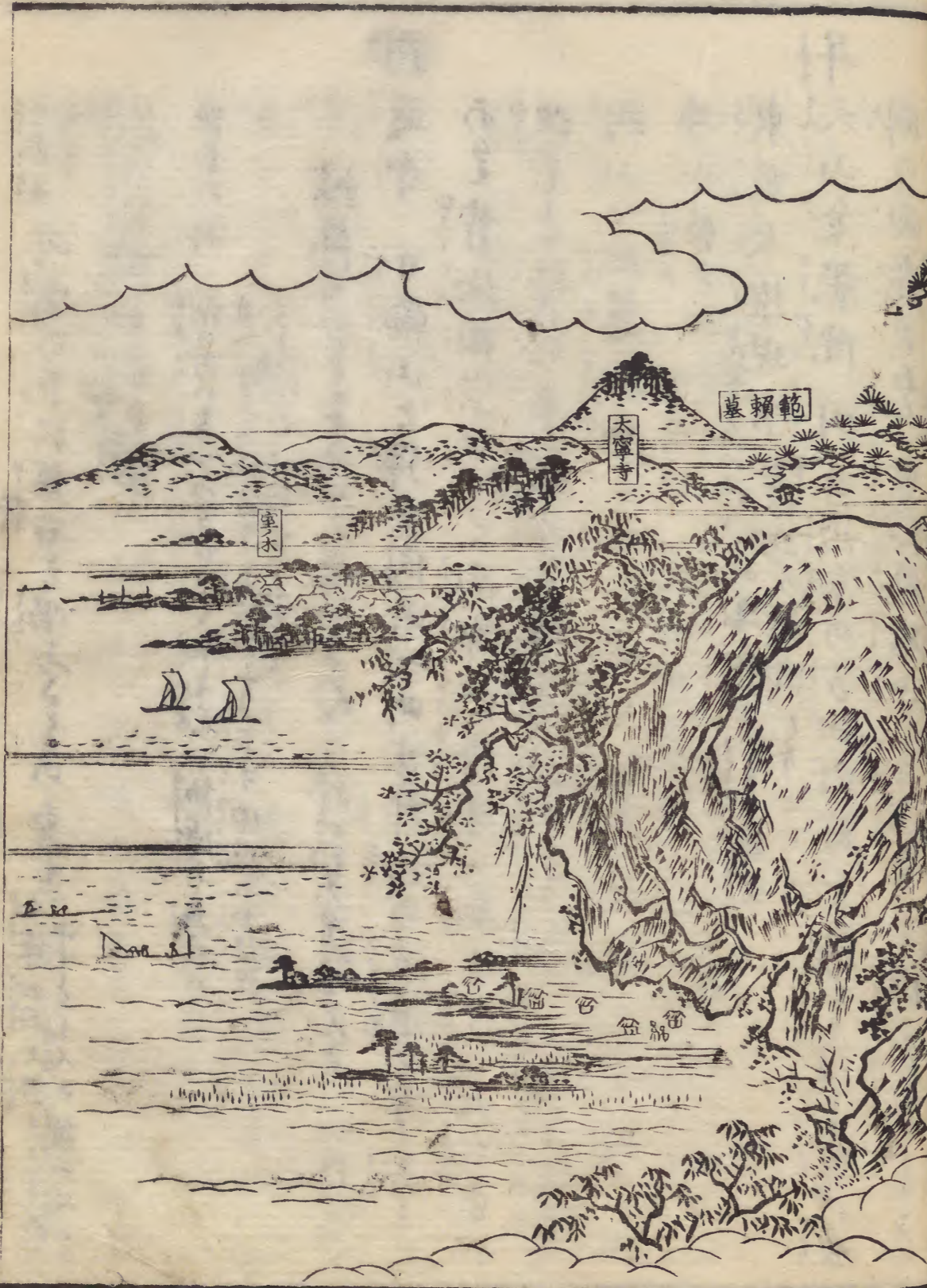
録倉紀行  
追つての山にハ大迦智勝佛伊豆と清一様ありと  
 神蔵さくられり

當社境内を千歳の古木雲を凌ぎ回岩社頭を清くみ  
 そろふ山の勢ひ実一巨靈神のまを延くつりくあり  
 此山を遷しえとあやむ社前の老樹浦風小靡  
 打寄る浪を下枝を洗み一根清浄なる時ハ六根共に  
 清く我人の頭も神もやとつとさくそとを

瀬戸辨財天 同社前道と隔て南の入海へ薬出く  
 小島よあを昔頼朝卿の御臺所平の政子御前江州  
 竹生島の御神を勧清せられりとあり  
島の中泥拍を多く  
 植へる



瀬戸  
 辨財天



金龍院  
飛石

奇形甚なり 同橋の下に福石と唱ふるものあり 金澤四石と稱し此石の  
前より拾ひぬるものあり ありは必有福の効と云ふ

鎌倉記行 社のありありとてわづらひて天を仰ぐ 社一才二の格あり高のめりて木海風ふあひ死  
うらなひの格をあらひ

浮菴 浮菴のしつとわづらひて海をさかす 社のありありとて

圓通寺 日輪山と號を同所二町半計西の方道より右

あり昔法相宗より南都法隆寺に属す今八天台宗に

改め江戶の東叡山に属せり本寺を元三大師と安置を

岡山ハ法慧法印と号久世大和彦源廣之寺領を附

せり

東照大権現宮 山の上は鎮座なり 郡官

昇天山金龍院 同所西南の方四町餘を隔て同道左

側の海岸あり世俗飛石山とも呼ばる禪宗に

鎌倉の建長寺に属せり本寺正觀音座像二尺三寸行基

大士の作なり 鎌倉志に虚空藏菩薩と方崖元圭和尚を以て

岡山と稱す 和尙ハ徳三年九月十六日寂す 廣は九尺をもち巨

飛石 當寺後園の山の麓あり高一丈あり 此石上は飛移りありと云

震為りて此地と稱す 此地の地震あり 曲折して登るの備あり 亭の

九覽亭跡 此地の眺望あり 又多景なり 寺僧云此地の

八景に能見堂を加へて見ざるありと云

泥牛庵 金龍院の前路を隔て向側あり 禪宗あり

鎌倉圓覺寺に属す本寺ハ七寸計の唐佛の土面觀音の

像を安んず此庵の岡祖ハ圓覺寺の傳宗庵南山和尚

聖一國師の嗣法なり 建武三年 中興ハ習甫玄道座原と号す

十月七日寂崇壽寺の岡山あり 當菴の南一町半山の上古墳二基あり其一ハ海老名

長門守といふ人の墓あり 此人泥牛庵あり 自害

終つひと云いはすはの時とき世よ事實じじつととも小こ措そししかかすす  
猶なほ考かうへへ 按おはし海うみ老らう名な源げん三さん季き貞ちん

荒井あらい妙法みょうぽう日荷にっか上人じゆんじん加持かぢ水みづ 同どう所しよ農家のうか金子かねこ氏うぢの地ちも存ぞん在ざいす

井いと云いはすはの味あじ甘かん美みめめ 尤なほ靈れい泉せんととり 此こゝ所しよのの小こ地ち名なをを

荒井あらいとと稱なづけけ 往むか古こ日にっ荷か上じやう人じん荒井あらい平へい次じ郎らう光こう吉きちとと号ごう

一いっ々じやく此こゝ地ちも居ゐ住ぢゆうせせ ふふりり かかくく呼よままるるととなり

能のう仁にん寺じ舊きう跡せき 今いまのの末ま倉くら後ごのの陣ぢん屋やのの地ちありありととのの此こゝ寺じハハ昔むかし

鎌倉かまがら志し古こ記き曰い 上じやう杉しん房ぼう州しゆ太たい守しゆ築くわ武ぶ州しゆ金かね澤ざい能のう仁にん寺じ

創すゑ七しち宇う伽が藍らん請しん方ほう崖げん和わ尚じやう為ゐ開かい山さん第だい一いつ世せ辨べん山さん曰い福ふく

永えい德とく三さん年ねん小せう春しゆん日にち太たい守しゆ有あ旨し隆りゆう能のう仁にん寺じ位ゐ列れつ諸しよ山さん者しや也なり

二に年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ之の東とう暉き曇どん昕しん謹こん記き又また本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん大だい檀だん那な房ぼう州しゆ道だう合が德とく珠しゆ書しよ之の喜き上じやう總そう州しゆ法ぽう眼がん朝ちやう榮えい作さく

能仁寺佛殿梁牌銘 鎌倉建長寺の龍峯庵

恭願皇圖鞏固而四海昇平熱庶安寧而五穀豐稔  
檀那前房州太守菩薩戒弟子道合敬白在伏冀佛  
運帝運歷永劫而綿延寺門經萬年以昌盛昔  
永德二年壬戌四月日開山方崖元圭謹題右

六浦山ろくほらさん上行じやうぎやう寺じ 泥牛庵でいぎやうあんより六七町西南の方道より右側に

ありあり當あた寺てら往むか古こハハ真言しんごんの古刹こせつゆゆ六浦山ろくほらさん金全寺きんぜんじと号ごう

然しかるる小應安年中せうおうあんねんちゆう此住持某日蓮ぢゆうぢの法ぽうと号ごう日蓮宗ぢゆうぜんしゆとあり

北きた德とく中ちゆう山さんのの日にち祐すけ上じやう人じん閑祖かんそとと自みづからら妙法みょうぽう日荷にっか上じやう人じんと号ごう次じ

祖師堂そしだう 宗祖しゆんそ日蓮ぢゆうぜん大士だいしの像ざうを安やすんん 法華經ぽうわきやう讀よみ誦じゆののととあり

日にち法ぽう上人じやうじん三十三歳の年さんじさんさいのねん日常上人じちじやうじやうじんの指圖しゆどより彫造てうぞうせせととあり

祖師木像胎中收藏法華經書寫人名簿 紙ハ常用の紙あり

包紫銅の徑筒ほうしちゆうハ入いりり胎中たいちゆうハ収おむむ徑筒きやうじゆうハ明和年間めいわねんかんの製せいののととありあり法華經ぽうわきやう



六浦  
上行寺



八卷小書写の人名簿一巻共小九卷あり其文よ云く

御身の御經奉書寫之人

安立坊の南山

一	卷	良圓融律師	日源
二	卷	正圓坊	日秀
三	卷	良祐莫坊	日正
四	卷	良乾莫坊	日秀
五	卷	衆寧阿坊	日秀
六	卷	衆寧阿坊	日秀
七	卷	衆寧阿坊	日秀
八	卷	理賢坊	日理

奉造立 右願主 卿公沙門 妙法親父母

奉讀誦妙法蓮華經五部

方便品 壽量品 陀羅尼品 自我謁

奉各十遍宛讀誦之

奉讀誦 十如是 自我謁 題目百廿五

奉唱題目一萬反 日源敬白

應永十三年丙戌十月十三日 御身ノ形相中老日法上人御作也

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益者尔住迹用本

釋迦堂 本尊釋迦多寶四菩薩 當寺住昔 眞言宗

六浦妙法日荷上人石塔 祖師堂と釋迦堂との間櫃の本にあり

上下とも後人造り添へたるものなり 宗門の石の横面は文和二年六月

蓋し肖像ハ中山法華寺ニあり又妙法の住持ニ  
間々此の地を荒井と云ふ前の日荷上人の持水の条下ニ詳あり又云  
記ハ妙法禪門日荷上人六浦荒井の城主掃磨寺と号すとあれども  
或ハ此妙法ハ杉田如法と号す北条時頼の臣なりと云ふれども時頼  
以テ考ふべき時代ハあはれ

寶篋印塔 祖師堂の前左の方の山の裾ニあり高一丈二尺あり  
當寺往古真言宗なり一證  
按ニ米倉家陣屋の上より上行寺の後の山積ハ知足山龍華寺の旧地あり  
支院花藏院の門前ニあり橋あり

鎌倉志ニ當寺什宝ニ位牌一枚あり日祐上人の筆の曼陀羅を  
彫其下に日祐上人一世の間引導せし人の法号俗名成  
奉々應安三年と記せり又日祐上人の大曼陀羅及日蓮  
大士の消息等と存する由記されし今當寺に傳へ  
すと云

金剛山嶺松寺 同所三丁斗を隔て西南の方道より右側ニ  
あり禪宗中々建長寺龍峯庵ニ属す本寺ニ釋迦如来の  
本像を安置せり関山々月憲和尚と号し  
二日 儉約翁の法副なり傳へ云當寺ハ千葉介胤義の建立と  
鎌倉志ニ瀬戸明神の鐘の銘ハ神主平胤義とあり神主ハ  
平姓千葉氏なり此人の建立欵千葉系圖ニ胤義と云  
有リ寺建立の事ニ詳なりと云

六浦 東鑑ニ將軍家此地ハ遊覧の事ニ往く云々  
又同書ニ建久三年壬子二月廿四日丁卯武藏國六浦海辺ハ  
上徳五郎兵衛尉忠光を梟首す義盛是をなす  
云々又鎌倉大草紙ニ應永四年正月廿四日小山若丸丸  
子との二人弱年ありあを會津の三浦左京大夫是を  
召捕鎌倉へ進上しと實檢の後六浦の海ニ沈らる  
とあり

北条九代記中田村莊司則義小山若丸丸ニ與  
其子五歳と七歳と



侍從川  
光傳寺



たうとを捕く六面の沖に沈みせうけりしとありて興あり  
永祿の頃ハ小田原北条此地を領し六浦亦曾分の地ハ  
武田家へ付し同所大道分の地を龍源軒とす小付  
たう由分限帳よんえてし

澤庵和尚鎌倉記行

あられハ三日鎌倉へ移る一坂を登れハ  
野ありこのあむむはの海とこハま  
こころ海生の子と此あそみをとる

海士の中より此ありとせん

海士の中より此ありとせん

六浦川

此地の道を横きりて流る小溝を云又此溝は架す

小橋と六浦橋と号くといふ

日光山專光寺の廻り光傳寺の廻りの地の字を川村と称し按る昔の水流の  
専光寺の廻り光傳寺の廻りの地の字を川村と稱し按る昔の水流の

日光山專光寺

嶺松寺より二町計を隔てて南の方道あり

右側はあを浄土宗中々同所天然寺は属を本尊十一

面觀音ハ立像一尺計あり佛工春日の作なりと云相傳ふ

照天姫の念持佛ゆき姫松葉ゆき燻らるし一時身代

す小立しと云傳へり寺の後の方より日光権現の宮あり

故小山号とす

油堤

同一寺の後の田圃を隔てて町あり西の方小續き

ゆる山を油堤と云由土人云里鎌倉志や傳光寺の里諺に

照天姫の乳母侍従と云るもの姫の粧具を携へ此不連

尋来りしと云も姫の形方志と云るを歎き悲しと云彼粧

具を捨て終り此所の川へ身を沈めり故に号とす

と云り

侍後川川村と大間村との中間光傳寺の前を流る川の

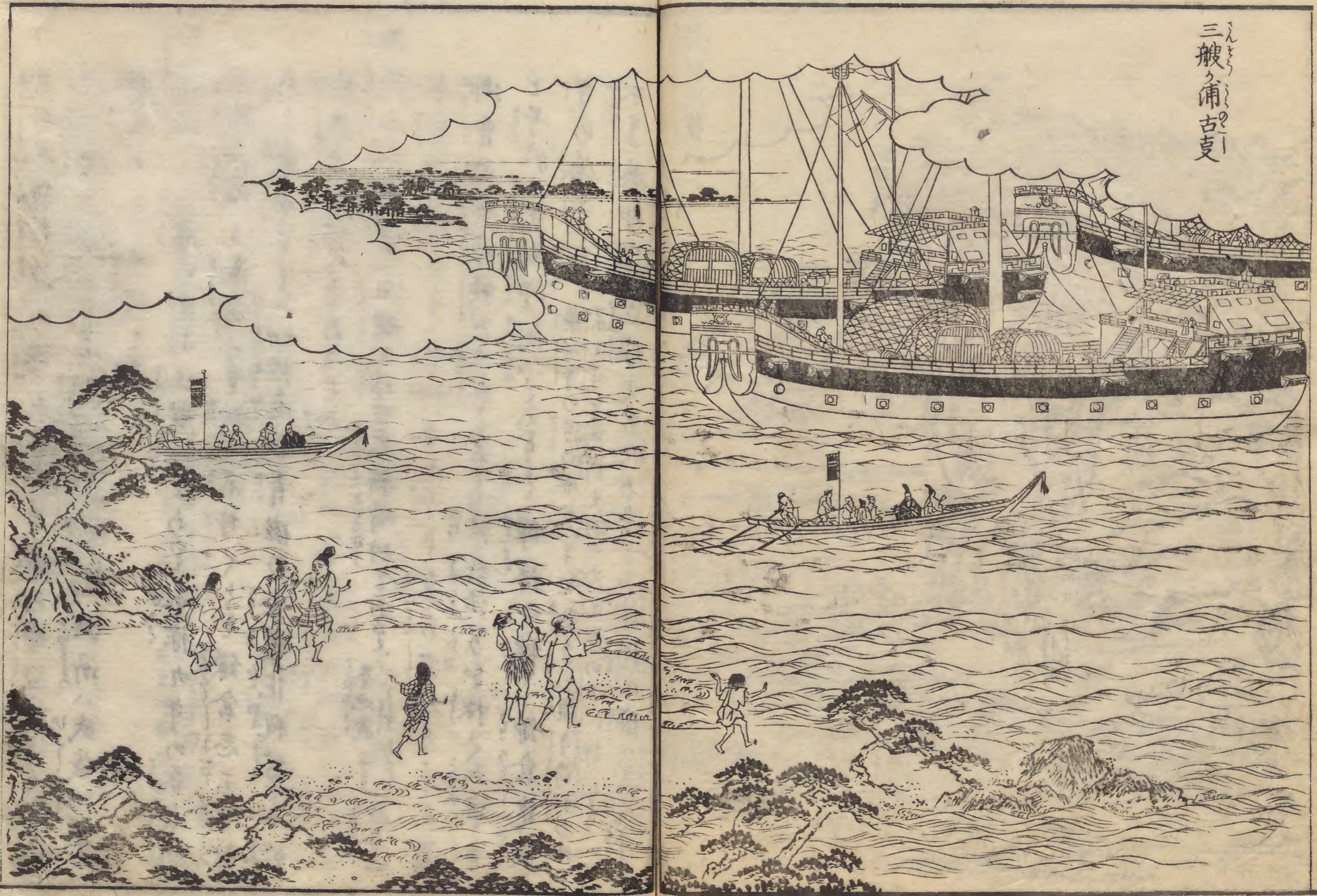
下流を以て水源を鎌倉より發し、未だ三艘村より盛濱へ  
 出く海灣を會し瀬戸街道へ横らりて架を橋を侍後  
 橋と号名義ハ油堤の条下ニ云々也。此橋を渡りて右の  
 道ハ武蔵相模の國境地蔵の辻へ出く鎌倉へ往還の道  
 ナリ。南行の道ハ三浦三崎への通路なり。左の川傍の道ハ  
 三艘浦又相州境浦郷等への道なり。

常見山光傳寺 同所北の端道より右側侍後川に傍る  
 あは浄土宗ありて鎌倉光明寺に屬を本寺阿弥陀  
 め来の木像を立像中々四尺斗ありて作者ありて  
 開山ハ得蓮社忍答靈傳上人と号門の内右の方  
 地蔵堂ありて本寺地蔵菩薩ハ立像六尺斗ありて  
 運慶の作ありと云地福山蔵光寺と号  
 界地蔵 土俗鼻缺地蔵と称し光傳寺より九下ありて

鼻缺地蔵



三艘之浦古夏



西の方鎌倉道の傍にあり巨巖の壁立し一所に  
此の像を鑄出せし此の像の鼻缺損也此所ハ武蔵相摸の  
國界中々々々峠村と号く  
三艘浦 六浦の南向三艘村にあり永祿九年の春唐船  
三艘此浦に着岸せし故に名付くし鎌倉志云其時  
舟に載来し一切経及び青磁の香爐花瓶等も皆  
称名寺に傳へありと云

海蔵山太寧寺 三艘浦の東頼崎村にあり  
布金の道場中々々々薬師寺と号し真言宗なり  
御曹司源範頼公生害あり後其法号を採り太寧寺  
と号し千光國師閑山とあり禪林に轉し鎌倉建長  
寺の属寺と也薬師寺の号の廢せんを歎き寺前村の地へ  
本寺薬師如来立像丈五尺あり十二神將の像ハ三尺あり

あり共運慶の作鎌倉志に當寺勸進帳を引く  
云往古 伏見帝永仁年間此村に貧女あり父母の忌  
日に當りし佛に供養しき便かり絲を繰  
卷子とて賣り佛餉に備へんと然れども  
容易に買人なり或時童子一人来り是を買ふを價を  
以て父母の忌日に供養の料に充ち佛前に至る小  
件の多きを多くを依り知ぬ如来貧女に純孝の志を  
感し自ら以来へと薬師と云とあり此故は今も此薬師  
佛へ肩頭を打つあり

時其祈願成就の報賽と云々  
蒲冠者 範頼靈牌 定門神像裏に範頼公建久四癸丑年八月と  
彫付  
範頼墓 本堂の後の山麓にあり高は二尺六七寸あり  
又頼朝の申して伊豆に越景時父子三人五百餘騎を修善寺に押寄は

範頼ハ或坊よ小祇よ大口計り少くおをいさるる差詰那結散く小射あひるる  
其後景時煙を静り範頼の焼首取らば倉小持て後頼朝ふんせをまつ  
とあり鎌倉志よ云くを役を此地小華しを村議とあり

題 太寧寺六首

寺樓一抹晚江煙  
老矣身心機事外

朝送鐘聲落釣船  
閒鷗容我社中眠

殘曉香消柏子煙  
聞君去借江村宿

一老來無夢  
夜鷗邊看月眠

六浦遙連三浦煙  
興來撐棹竊佳處

越風隨岸幾移船  
月落前灣猶未眠

山街夕日水籠煙  
蓋世功名身外事

雪後蘆花月滿船  
幾人能得一菴眠

晚興進留江上寺  
衲衣懶惹御爐煙

還愛華亭載月船  
三山翠映白頭眠

功名盖世畫交煙  
一錫歸來楓外寺

失墜危於豔顏船  
白沙翠竹閉門眠

當寺書院ハ北向小瀬戸の入海を眼下よ臨く風光殊ふ

勝れく寺寶よ範頼自筆は古奇の懸幅及陣中用

らと云長刀一振あり

宮根権現社瀬崎の東室本村よあり又民家の間よ犬樟の

老樹あり

雀浦同所の南北出崎を以菅神の小祠あり故よ土人ハ

天神崎とも称此地の海湾と浦の江と云

巾着巖同所絶壁の下よあり大さ二間四方は盤石あり潮尽

根附巖同所百歩とくまを隔く西南の方北崖下よありと云

前の巾着岩

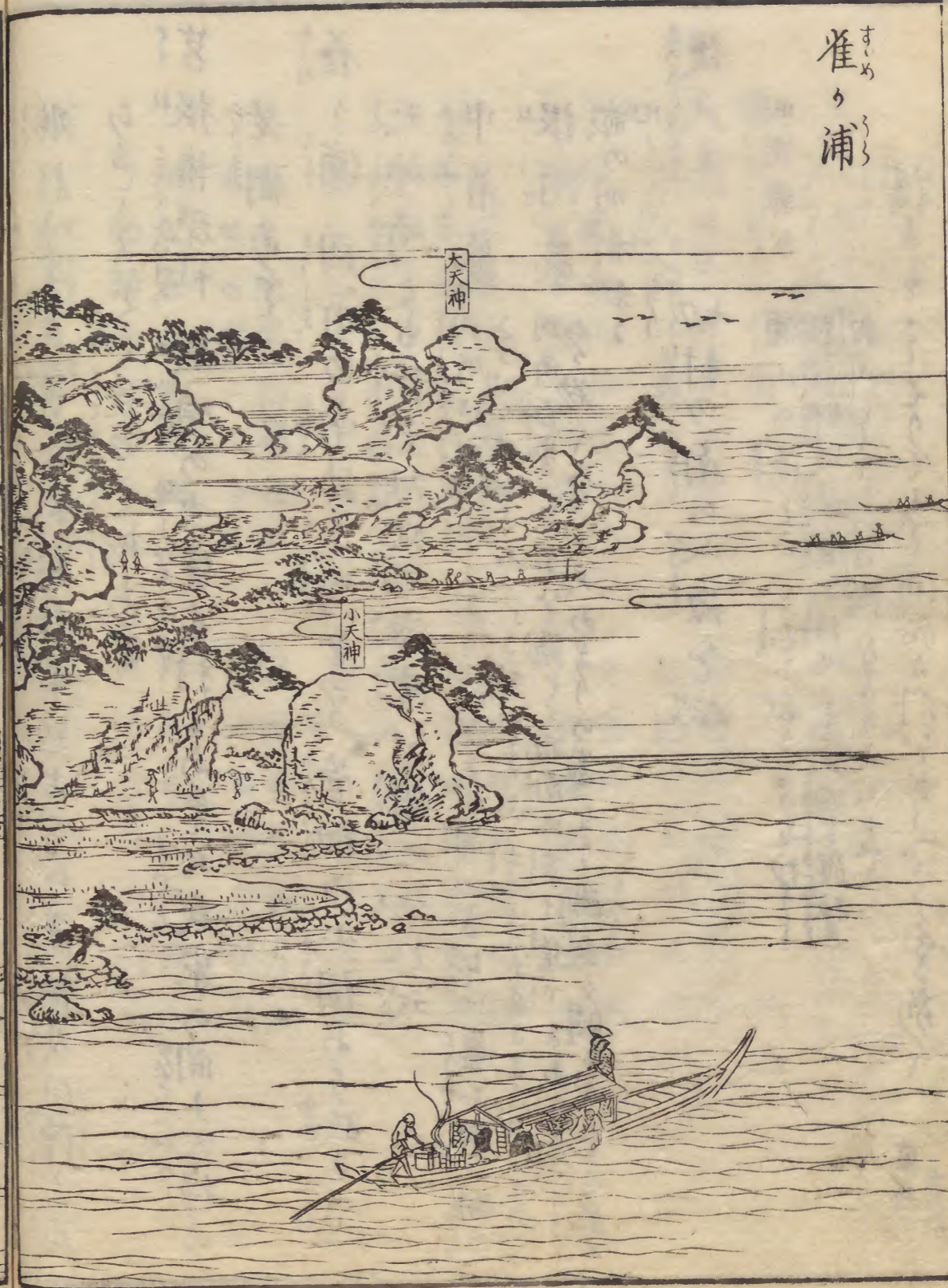
搜戸湊刀切村の南の入海と云

田園雜記

浦川の湊といふ所あり此の浦は古くよりあり  
浦川の湊といふ所あり此の浦は古くよりあり  
浦川の湊といふ所あり此の浦は古くよりあり

搜戸をさす浦の浦をさす浦の浦をさす浦の浦をさす

道真 准后



す  
め  
づ  
り  
浦

鳥帽子島 同所東の出崎の小島と云ふ形状鳥帽子に似  
たる故小名とせり

鎌倉記行 名保一海と云ふと云ふ

終夕小浪を巻ぬる鳥帽子沖より吹き風折やれ浮庵

夏島 同所東にあり長三町餘を横一丁計此小島なり

里人云く玄冬の雪と云ふ積りなりと云ふ

鎌倉記行 夏島を名のこなりと云ふ時ハ冬ありと

之冬ふし降白雪此たもぬと云ふ島の名を清人 浮庵

猿島 夏島の東南にあり五丁四方を有るあり

裸島 同所二三町を離れたる小島なり

按て浮庵和尚の鎌倉記行に笠島と云ふ名を挙ぐそ裸小

かくあれともは地は笠島ありと云ふは猿島裸島二島の  
中と云ふは、を〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

甲香 此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲

香ハ螺貝の様なり小く口の程は細長ゆ〜〜〜出〜

貝の蓋なり武蔵國金澤と云浦にありと云ふ所の者ハ

乃〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ゆ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜



Handwritten text at the top right of the page, possibly a title or header.



Main body of handwritten text in Japanese, arranged in vertical columns. The text is somewhat faded and difficult to read.



